

月 例 会

| | |
|-------|-------------------------------|
| 文章責任者 | 石村誠人 |
| テ ー マ | 荒らぶる・早稲田ラグビーの強さの秘密と日本ラグビーのプロ化 |

3/26(水) に開催された月例会は、日比野弘氏（早稲田大学人間科学部教授、日本ラグー・フットボール協会副会長）をお招きし、（荒らぶる・早稲田ラグビーの強さの秘密と日本ラグビーのプロ化）と題して、お話しを伺った。

日比野氏は、昭和9年銀座生まれ。東京空襲の前日に、練馬区大泉に疎開したこと、銀座の陶雅堂という家業の店を閉鎖して好きなラグビーに専念したこと等、自己紹介から始められる。

次いで、1823年に英国のラグビーという町で、ウィリアム・エリス少年が、フットボールの球を持って走ったことから始まったラグビーの歴史に触れられる。（ラグビーボールは、豚の膀胱で出来ていた当時のボールが変形して楕円形になったとか。）

日本には、1899年に慶応大学でケンブリッド大学出身のG・B・クラーク教授が紹介したのが嚆矢だという。

ラグビーは、15人という最多数のメンバーが参加するスポーツであり、適材適所（身体が大きく、足の早い選手だけのスポーツではなく、いろんな選手の組み合わせが大切）とFor The Teamが大切と強調される。

All For OneとOne For All（勝利を目指して、皆んなは一人の為に、皆んなのことを考えプレーする）の精神で、得点をあげた選手がガッツ・ポーズをとらない理由を解説される。そして、試合が終わることをラグビーでは、ノー・サイドといい、敵味方の区別がなくなり、仲良くなるスポーツだと語られる。

早稲田大学ラグビー部は、大学日本一を最終目標に、約90名の部員が6

チーム編成で切磋琢磨している。試合に出場できるのは、15名と補欠7名のみだが、試合に勝つことのみを基準に、監督は選手を選んでいる。選に漏れた者は、悔しいだろうが、チームの為に声援したり、何か役割を果たしてもらっている。後年出会った時に、あの頃は良かったと喋り話しかけられる時に、監督・コーチとしての喜びを感じる。

論理的スポーツであるラグビーには、必ず工夫点がある。相手チームにトライされたうち、何個かは取られずに済んだと反省点がある。勝ち続けることは難しく、必ずスキが生じてくるものだ。そこに工夫の余地がある。

早稲田大学初の専任監督となった清宮克幸監督と天然芝の上井草ラグビー練習場が、昨年変化した点だ。大学生なので授業優先で、一日2時間と短時間で、各自目標を持った練習をさせている。フィットネスもその一つで、上井草の合宿所には機械が導入されている。

コーチは、分析力が必要である。相手チームに勝つためには、人を代えるか戦術を変えるかだ。明治大学は（縦への突進）、早稲田大学は（横への揺さぶり）ということが知られているが、縦と横の組み合わせが大切で基本は同じである。

次期のキャプテンは、卒業前の4年生に推薦させるシステムを早稲田大学では、伝統的に採用しているが、キャプテンに求めていることは、目標を達成してみせるということだ。

社会人と大学では力の差が歴然としてきている。今年4月から、ラグビー選手の一部プロ化が日本でも始まるが、まだアマチュア精神が色濃く残ったスポーツである等々、お話を続いた。

8時から9時まで、ビールを飲みながら、質疑応答があった。（参加者数：22名。司会：福島洋一、講師紹介：石村、飲料手配：村上、受付：早乙女。） さらに、9時過ぎから日比野氏を囲み、遊々酒家に於いて10時まで有志の懇親会が続いた。